

「ものを思ふ」について

— 万葉集・源氏物語・三三の歌集を資料として —

東 辻 保 和

1
わたくしは、前稿⁽¹⁾において、中古における「もの」を前項とする連語に、その形態および意味の両面から、基礎的検討を加え、複合語認定の最もむづかしいのは、「もの」と、 \wedge 主観的情意を表わす形容詞性の語 \vee とが連合した場合である、と論じた。

「もの」に関しては、従来も色々の角度からする論者が発表されてきているが、本稿では、特に、右に述べた複合語認定の前提という観点から、「もの」を論じてみることにする。

2
前稿において述べたごとく、「もの」と、「うし」「かなし」「さびし」などの \wedge 主観的情意を表わす形容詞性の語 \vee とが連合した場合、「もの」と後項との関係は、文構成の型に準ずれば、 \wedge 対象語 \vee と \wedge 述語 \vee との関係として扱えられる。

そして、この場合の後項は、すべて心理作用の表現であるから、

この種の連語は、一般的には、「ものを思ふ」として表わすことが可能である。(以後、この表現形式を母型と呼ぶ。)また、母型における「もの」の意味内容の検討は、この種の連語における「もの」についての、基本的性格を明らかにするうえに、重要であると考えられる。

そこで、まず、万葉集では、いかなる用法がなされているか、を考察することにする。

母型は、具体的には、次のように表わされている。これを変型と呼ぶ。

モノオモフ \wedge 物念 \vee ・モノモヒ(フ) \wedge 毛乃母比・毛能毛布など \vee
・モノヲオモフ \wedge 物乎念 \vee ・モノヲゾオモフ \wedge 物能乎曾於母布など \vee ・モノナオモヒソ(オモホシ) \wedge 物莫念など \vee ・モノハオモハジ(ズ) \wedge 物者不念 \vee ・モノカオモハム \wedge 物可将念 \vee ・モノヲモハズ \wedge 物乎不念 \vee

全部で五十例をかぞえる。⁽²⁾

ところで、万葉集では、母型が、多く恋愛の場面に用いられていることは、すでに、高森亜美氏の論文にも見られるが、その恋愛感情をも含めて、「もの」の表現的意味を更に詳細に分析すると、次のようになる。

なお、用例は、紙幅の都合により、各一例に止める。

A 長く恋人に会えないつらい恋

毛能毛布等 比等爾波美要羅 之多婢毛能 思多由故布流爾

都奇曾倍爾家流 (三七〇八)

B 片思いのわびしい恋

秋田之 穂向之所依 片縁 吾者物念 都礼無物乎 (二二四七)

C 時鳥・千鳥・鶯・鶏と組み合せた悩む恋

古非之奈婆 古非毛之禰尊也 保等登藝須 毛能毛布等伎爾

伎奈吉等余牟流 (三七八〇)

D 素朴な慕情

云云 物者不念 朝露之 吾身一者 君之随意 (二六九一)

E 右に含まれない悩む恋

大船之 泊流登麻里能 絶多日二 物念我奴 人能思故爾 (一一二二)

一一二二)

F 何らかの不満の原因となる事情

驗無 物乎不念者 一坏乃 濁酒乎 可飲有良師 (三三八)

G 何らかの憂えの原因となる事情

吾大王 物莫御念 須死神乃 嗣而賜流 吾莫勿久爾 (七七)

H 旅路の憂えの原因となる事情

草枕 客爾物念 吾聞者 夕片設而 鳴川津可聞 (二二六三)

I 右のほか、さまざまな思いの対象となる事情

浅茅原 曲曲二 物念者 故郷之 所念可聞 (三三三)

以上、「もの」は、恋の悩ましさをはじめ、何らかの憂愁の原因となる事情を表わしている、と言えよう。そして又、二九六・一四七六・一五七九の三首を一応除けば、他の母型ならびに変型は、すべて、解放的よりは閉鎖的、陽性よりはむしろ陰性の情感を伴っていることも見逃せない。

ところで、二九六(蘆原乃 清見之埒乃 見穂乃浦乃 覓見乍

物念毛奈信)においても、三保の浦の豊かな情景に接して、人もの思いVのなくなることを感じたとすれば、この人もの思いVは、やはり陰性のそれとしてよからうし、一四七六(独居而 物念夕爾 霍公鳥 從此間鳴渡 心四有良思)にしても、その場面から推測するのには、これもまた、陽性の人もの思いVとは受け取れないのではないか。また、一五七九(朝扉開而 物念時爾 白露乃 置有秋芽子 所見喚鷄本名)の場合、「朝戸をあけて物思いをする時に、白露の置いた秋萩が見えて、よしなく愁いをそそる」(古典大系・万葉集二・88へ頭注)のような解釈も可能である。

とすれば、万葉集の用例を通じて、すべて陰性的情感を伴っているということができるとはなからうか。

3

それでは、中古においてはどうか。二十一代集および新葉集を通じて、母型ならびに変型に検討を加えた。(なお、十三代集・新葉集を加えた理由は、和歌表現の伝統性を考慮したからである。)

これら二十二の歌集では、母型は、次のような変型とともに現われる。

もの思ふ・ものぞ思ふ・ものな思ひそ・ものは思ふ・ものや思ふ・ものをこそ思へ・ものをぞ思ふ・もののみ思ふ

このような母型ならびに変型の見られる歌は、全部で二八一首である。(4) 部立毎に、その出現度数を調べると、次表のごとくである。

部立	十三代集		計
	八代集	新葉集	
春	4	8	12
夏	7	4	11
秋	19	28	47
冬	5	2	7
恋	46	91	139
旅 <small>嶋</small>	1	5	6
祇 <small>神</small>	2	1	3
教 <small>釈</small>	0	2	2
雑	18	31	50
傷 <small>哀</small>	2	2	4
計	104	174	281

以下考察を加える。なお用例は、第二章と同様の理由により、それぞれ少数に止めた。

(イ) 春の部について

A

今もまた昔ながらの春にあひて物思ひなく花を見るかな(続拾遺)

年ふれば齡は老いぬ然はあれど花をし見れば物思ひもなし(古)

今)

これらは、いずれも「物思ひ」の否定において、春を讚美したものである。従って、その讚美は消極的と言ってよく、否定されるべき「物思ひ」が心中にあるということであり、その「もの」は、何かの憂え・悩みの原因となる事情であり、「物思ひ」は、当然、明るさよりは暗さ、楽しさよりは苦しさの情感を伴っていると考えられる。

B

羨しいかなる花か散りにけむ物思ふ身しも世には残りて(後拾遺)

けふ暮れぬ花の散りしもかくぞありし二度春は物を思ふよ(千)

戦)

桜花にはふにつけて物ぞ思ふ風の心のうしろめたさに(新後拾遺)

後拾遺の例は、パラドクシカルな発想になっており、その点が他の二首と異なるが、いずれも、春や花に寄せる心の動揺・不安を基調とした思いであり、その意味において、やはり、陰性の否定的内容の「もの」であると見られる。

(ロ) 夏の部について

A

汝れだにも語らひ捨つな時鳥物思ふころの夜半の寝覚を(新千載)

独りゐて物思ふわれを時鳥ここにしもなく心あるらし(後撰)

いずれも、時鳥への一種の感情移入である。前者は、人の思

いVゆえに眠れぬ自分のために、せめてもの慰めとなれかしと呼び

かける。後者は、「物思ふわれ」のわびしさ・孤独感を紛れさせようとする。「もの」は悩ましい恋か。

B 郭公夜深き声を聞くのみぞ物思ふ人のとりどころなる (後拾遺)

待たねども物思ふ人はおのづから山郭公まづぞ聞きつる (続拾遺)

いずれも、「物思ふ人」と郭公の声との取り合せである。前者は、郭公の「夜深き声」を聞くことが、「物思ふ」ゆえに眼れぬ人にとって、せめてものとりえであるという、一捻り捻った、苦しいAもの思いVの肯定である。後者で、Aもの思いVに沈むがゆえに、最初に山郭公の声を聞くのである。「もの」は、やはり悩ましい恋か。

C 五月雨の続ける年の詠めには物思ひあへるわれぞわびしき (後撰)

空蟬の声きくからに物ぞ思ふわれも空しき世にすまへば (後撰)

五月雨や空蟬の声が、Aもの思いVを誘発し、深化する。前者は、「物思ひあへる」ゆえに「わびし」いのであり、後者は、「われも空しき世にすまへば」という、内省を媒介とした、きわめて否定的なAもの思いVである。「もの」は、いずれも悩ましい恋をはじめ、歎かれる人生かと思われる。

以上のごとく、夏の部に現われる母型ならびに変型の「もの」が、いずれも、孤独感・わびしさ・人の世のはかなさ・その他の憂

え等の感情の、原因もしくは対象となる内容を表わし、「ものを思ふ」の情感としては、すべて、陰性的情感を伴っていると言えよう。

5. (ハ) 秋の部について

A 「露」と組み合わせ、秋のわびしさの原因となる事情を表わす。

物思はでかか露やは袖に置く眺めてけりな秋の夕暮 (新古今)

物思ふ袖より露やならひけむ秋風吹けばたへぬものとは (新古今)

この類は、十七首の多数をかぞえる。

B 「露」以外の秋の風物により、誘発され、一段と深化されるわびしさの原因となる事情を表わす。

いづはとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ふことの限りなりける (古今)

物思へとする業ならし木の間より落たる月に小男鹿の声 (風雅)

たそがれに物思ひをればわが宿の萩の葉そよぎ秋風ぞ吹く (玉葉)

いとどしく物思ふやどを霧こめて眺むる空もみえぬけさかな (新勅撰)

この類も、二十七首の多数をかぞえる。

C 秋の風物に託して表わされるわびしさの、原因となる事情を表わす。

きえかへり物思ふ秋の衣こそ涙の川のみぢなりけれ (後撰)

唐衣立田の山のみぢ葉は物思ふ人の袂なりけり(後撰)

このように、「もの」は、人の世のはかなき・わびしさ(恋愛感情)と思われるものが多い。)の原因となる事情を表わし、それらの感情をしみじみと味わうのが、秋の部の母型ならびに変化型に共通した情感である。

(三) 冬の部について

A

雪のすこし降る日女に遣はしける

藤原かげもと

かつきえて空にみだるるあわ雪は物思ふ人の心なりけり(後撰)

撰)

降る雪に物思ふわが身劣らめや積り積りてきえぬばかりぞ(後撰)

撰)

右は、ともに、降る雪に「物思ふ」心を譬えたものであって、前者は、その詞書から判断して、女性への思いであることに疑いなく、後者も、読み人知らずではあるが、やはり、同類の思いと見てよからうと思われる。

とすれば、「もの」は悩ましい恋か。いずれも、陽性と言うよりは、むしろ、しんみりとした情感の籠った、陰性の思いと見るのが妥当であろう。

B

やよ時雨物思ふ袖のなかりせば木葉の後に何を染めまし(新古今)

今)

いとどしく物思ふ夜のひとり寝に驚くばかり降る時雨かな(新拾遺)

冬の夜に幾度ばかり寝覚めして物思ふ宿のひましらむらむ(後撰)

拾遺)

これらの「もの」が何であるか、明確には判らないが、前二者は涙を催すAもの思いVであり、最後のは、寝覚の原因となるAもの思いVである。(この作者は増基法師)。

とすれば、「もの」は、何らかの人間としての悩み・歎きの原因となる事情を内容とした語と理解すべく、「物思ふ」は、すべて陰性の情感を伴うものと考えるのが妥当であろう。

以上、冬の部に現われる母型ならびに変型も、上述の諸項と同様、否定的内容を表わす「もの」であり、陰性的情感の籠った「もの」を思ふ」であると見られる。

(ホ) 恋の部について

恋の部における「もの」は、すべて恋する心ではあるが、それがいかなる恋心であるかを検討する必要がある。そこで煩を厭わず、細かく内容を分析してみた。

A 何らかの不安を抱かせる恋

逢ふ夜さへ物思へとや行く末を定かに人の契らざるらむ(新統古今)

長からむ心も知らず黒髪乱れてけきは物をこそ思へ(千載)

B しみじみと独り味わう恋

いかに寝て見えしなるらむ転寝の夢より後は物をこそ思へ(新古今)

遙なる岩のはざまに独り居てひとめ思はで物思はばや(新古今)

C 恋人と離れた後慕わしく思う恋

物思ひ越路の浦の白浪も立ちかへるならひありとこそ聞け(玉葉)

大空は恋しき人の形見かは物思ふごとに眺めらるらむ(古今)

D 忍ぶ恋 控えめの恋

物思ふと言はぬばかりは忍べどもいかがはすべき袖の雫を(新古今)

いはでのみ物思ふ人の袖なれやししのぶの草にむすぶ白露(新続古今)

E 改めて認識される恋

深川なに水上を尋ねけむ物思ふ時のわが身なりけり(古今)

鳴く鹿の声聞くごとに秋萩の下葉こがれて物をこそ思へ(玉葉)

F 一途なる恋

飛ぶ螢それかあらぬか玉の緒の絶えぬばかりに物思ふ頃(続拾遺)

夜もすがら月に憂へてねをぞなく命にむかふ物思ふとて(続後撰)

結ぶともとくとも知らで下紐のよに乱れつつ物をこそ思へ(玉葉)

G 片思いのわびしい恋

心から物思ふことはつれもなき人を恋ひつつ冀くなるかな(続後拾遺)

桂のみこにすみはじめけるあひだにかのみこあひ思はぬけしきなりければ

人知れず物思ふ頃のわが袖は秋の草葉に劣らざりけり(後撰)

H 右以外の惱ましい恋
物思はでただ大方の露にだに濡るれば濡るる秋の袂を(新古今)

忘れなむ今はと思ふ時にこそありしにまさる物思ひはすれ(玉葉)

今、便宜上、Fを除いてみるのに、他のすべての母型・変型に伴う情感が、すべて陰性のそれであることは、注目に値するであろう。高らかに恋愛を謳歌する情感ではなく、どこかに暗さの籠った、じめじめした情感である。

ところで、Fはどうか。この類の歌には、すべて激しい恋愛感情の迸りが見られる。しかし、概して、孤閨の不満・憂えの涙を伴う悲愴感など、満たされぬ思いを残したものが多く、積極的に、恋を遂げえた喜びを歌いあげたものは見られない。やはり陰性的情感の伴うことを否定することはできないのである。

(ハ) 羈旅の部について

物思ふ心の聞しくらければあかしの浦もかひなかりけり(後拾遺)

旅寝して物思ふほどに秋の夜の有明の月も出でにけるかな(玉葉)

概括的に言えば、すべて旅愁である。「もの」は、愁えの原因となる事情である。

(ト) 神祇・釈教の部について

男に忘られて侍りける頃貴船にまゐりてみたらし川に螢の飛

ひ侍りけるを見てよめる

物思へば沢の螢もわが身よりあくがれ出づる玉かとぞみる (後拾遺)

これは、詞書からしても明らかなく、「もの」は、悲しい失った恋である。

山寺にまうでて侍りけるにいとたふとく経よむをききて

物をのみ思ひの家をいでてこそ長閑に法の声も聞こゆれ (続後拾遺)

これなどは、いわゆる、煩惱の類であろう。いずれも、陰性の情感の籠った用法である。

(チ) 雑の部について

この部には、恋の部や四季の部に入れられてもよさそうな歌が多い。「もの」の内容を、明確に幾つかに分類することは、きわめて困難であるが、おおよそ次のように分けてみる事ができる。

A 涙を催さす憂えの原因となる事情

物思はでいづれの年の秋までか露に袂の知られざりけむ (新拾遺)

いかにせむ秋にもあらぬ夕だに物思ふ身はぬる袂を (続千載)

B 眠れぬ憂えの原因となる事情

物思はぬ人もや今宵詠むらむねられぬままに月を見るかな (千載)

まどろまで物思ふ宿の長き夜は鳥のねばかりうれしきはなし

(新勅撰)

C 春の愁えの原因となる事情

つれづれと物思ひをれば春の日のめにたつものは霞なりけり

(玉葉)

大方の霞に月ぞくもるらむ物思ふ頃のがめならねど (新勅撰)

D 秋の憂えの原因となる事情

詠むるに物思ふことの慰むは月はいき世のはかよりやゆく (拾遺)

あはれうき秋の夕のならひかな物思へとは誰がをしへけむ (続古今)

E 悩ましい恋

人知れず物思ふことはならひにき花に別れぬ春しなれば (詞花)

物思へば心の春もしらぬ身に何うぐひすの告げにきつらむ (玉葉)

F 哀悼の心を抱かせる原因となる事情

東三条院かくれさせ給ひにける又の年の春いたくかすみたる夕暮に人のもとへつかはしける

雲のうへの物思ふ春は墨染にかすむ空さへあはれなるかな (玉葉)

G 右以外の悩みの原因となる事情

時なりける人の假に時なくなりて歎くを見てみづからのなげきもなくよろこびもなきことを思ひてよめる

光なき谷には春もよそなればさきてとくちる物思ひもなし (古今)

前大僧正慈鎮遁世の暇申しけるに仰せつかはされける

君かくて山のは深く住ひせばひとりうき世に物や思はむ（続後撰）

なお、個々の用例の解釈については、異論もあることであろう。わたくしは、できるかぎり主観を排し、たとえば、八悩ましい恋Ⅴに入れてもよさそうに思われる歌でも、表現面に明確な根拠の得られないものは、あえてそこには入れないという態度を採った。

以上、要するに、「もの」は、何らかの憂愁・嘆きの原因となる事情であり、母型・変型とも、すべて陰性的情感の伴うこと、前項までに述べた所と全く同様である。

(リ) 哀傷の部について

堀川院かくれ給ひて後神無月風の音あはれに聞えければ
物思へど色なき風もなかりけり身にしむ秋の心ならひに（新古今）

朱雀院かくれさせ給うての頃志賀の山ごえにてよめる

そぼちつつ物思ふ人の行く道は流るる水ぞ導べなりける（新古今）

歌）

これらの「もの」は、哀悼の心を抱かせる原因となる事情であり、当然、そこには最も陰的な情感が伴っている。

以上、二十二の歌集を対象として、そこに表わされた、母型・変型における「もの」の内容と情感とについて、縷々説明を加えてきた。これらの検討の結果、「ものを思ふ」（変型を含む）は、恋歌や哀傷歌は勿論、四季その他の部立に収められた歌の場合においても、「もの」は、内容的には、憂愁・悲嘆の原因となる、内省的・閉鎖的意味内容を表わし、「ものを思ふ」には、情感的には、陰性

的情感の伴っていることが明らかになった。

ただ、考察の対象が和歌であるゆえに、表現の特殊性、いわゆる、和歌的発想の下における特殊現象ではないか、という疑問が残るわけである。そこで、次章では、源氏物語を対象として、考察を進めることにする。

4

論証の便宜上、「もの思ひ」の検討から進める。源氏物語における「もの思ひ」の「もの」は、大別すれば次のような内容を表わしている。なお、用例は前章同様、それぞれ少数に止める。用例総数は六十二例である。

A 歎きの原因となる男女間の愛情

志深からむ男をおきて、見る目の前につらき事ありとも、人の心を見知らぬやうに、逃げ隠れて人をまどはし、心をも見むとする程に、ながき世の物思ひになる。いとあぢきなき事なり。（帚木46②）(6)

やんごとなきかた（葵上）に、いと志深ひ給ふべきことも出で来にたれば、一つ方におぼししつまり給ひなむを、かやうに（源氏ノ来訪ヲ）待ち聞えつつあらむも、心のみ尽きぬべき事、（御息所ハ）なかなか物思ひの弊かさるる心地し給ふ。（葵340）(7)

この類に属する例は多く、約二十六例をかぞえる。

B 気苦勞・心配・疑惑などの原因となる生活上の事情

（僧）「亡くなり侍りし程にこそ（子供ガ一人）侍りしか。そ

れも女にてぞ。それにつけて、物思ひの催しになむ齡の末に思ひ給へ歡き侍るめる」(若紫183⑧)

(大井邸ノ)前裁どもの折れ伏したるなど、(源氏ハ)つくろはせ給ふ。(中略)きし方の事ども(明石デノコトヲ源氏ガ)宣ひいでて、泣きみ笑ひみ打解け給へる、いとめでたし。尼君、のぞきて見奉るに、老も忘れ物思ひも晴るる心地して、うちぞみぬ。

(松風218④)

この類に属する例も多く、約二十七例をかぞえる。

C 歡かしい自己の運命

君(浮舟)は、さてもわが身行くへも知らずなりなば、誰も誰も、あへなくいみじ、と暫しこそ思ひ給はめ、ながらへて人笑へに憂きこともあらむは、いつかその物思ひの絶えむとする、と(自殺ヲ)思ひかくるにはさはりどころもあるまじう(浮舟135⑩)

(妹尼)「忘れわび侍りて、いとど罪深うのみ覺え侍りつる慰めに、この月頃見給ふる人になむ。いかなるにか、いと物思ひ繁きさまにて、世にありと人に知られむことを苦しげに思ひて物せらるれば(手習261⑦)

D 何らかの不快の原因となる事情

七日の夕月夜、影ほのかなるに、池の鏡のどかに霞みわたれり。(中略)例の辨の少将、声いとなつかしく、葦垣を謠ふおとど、「いとけやけうも仕うまつるかな」と打乱れ給ひて、(中略)をかしき程に乱りがはしき御遊びにて、物思ひ残らずなりぬめり。

(藤裏葉253③)

E 歡かわしい身分上の事情

いと口惜しき際の田舎人こそ、かりにくだりたる人のうちとけごとにつきて、さやうにかららかに語らふわざもすなれ、(自分 明石上ハ源氏カラ)人かすにもおほされざらむものゆゑ、我(明石上)はいみじき物思ひをや添へむ、かく及びなき心を思へる親達も、(中略)なかなかなる心をや尽さむ。(明石84⑩)以上のごとき内容を表わし、「もの思ひ」に伴う情感は、すべて陰性的情感である。このほか、「もの思はし」「もの思はしげなり」「もの思はしき」「もの思ひがほ」「もの思ひぐき」なども、やはり同様である。用例は省略する。

x x x

次に、母型ならびに変型——もの思ふ・もの思ひ知る・ものを思ひ知る・ものおぼす・ものをおぼす——の検討をする。

この母型ならびに変型は、わたくしの調査では、源氏物語中に、一一六例ある。(多少の見落しがあろう。)

ところで、これらの「もの」の表現的意味内容は、多くは、上述の「もの思ひ」における「もの」と交わるところがない。例えば次のごとくである。

〔甲類〕六月ばかりより、心苦しき気色(明石上ノ懷妊)ありてなやみけり。かく別れ給ふべき程なれば、あやにくなるにやありけむ、ありしよりも(源氏ハ明石上ヲ)あはれにおぼして、怪しう物思ふべき身にもありけるかなと、おぼし乱る。(明石93⑤)この「もの」は、苦悩の原因となる男女間の愛情である。また、

(大宮)「御事(夕霧ノコト)により、内のおとどのゑんじて物し給ひにしかば、いとなむいとほしき。ゆゆしげなき事(従兄妹同志ノ結婚)をしも思ひそめ給ひて、人(大宮)に物思はせ給

ひつべきが心苦しきこと。(略)「少女³²³」(6)

この「もの」は、大宮が孫の夕霧の将来に抱く心配の、原因となる事情である。

しかしながら、他方において、例えば次のような用例がある。

「乙類」(御息所)「心細くてとまり給はむを、必ず事に触れて(斎宮ヲ)かずまへ聞え給へ。(中略)かひなき身ながらも、今暫し世の中を思ひのどむる程は、(斎宮ガ)とざまかうざまに物をおはし知るまで、見奉らむとこそ思ひ給へつれ」(浴標¹³⁴)

(8) ここに言う「もの」は、いわゆる、人ものの道理Vとか人人情Vとかを表わしており、

さやうなる(未摘花ノヨウナ)すまひする人は、物思ひ知りたる気色、はかなき木草、空の気色につけても、取りなしなどして、(未摘花²⁴⁰)

ここに言う「もの」は、対校源氏新釈の頭注によれば、人風情Vに相当するという。そうして、これらの用例における情感は、かならずしも陰性の情感とは言えないものである。

ところで、何がゆえに、かかる結果が生まれるかを検討してみるのに、それは、「ものを思ふ」と「ものを思ひ知る」との違いに原因するようである。即ち、「ものを思ひ知る」の用例は、全部で二十五例をかぞえるが、その中、やや曖昧な一例(紅葉賀²⁹¹)を除いて、他はすべて、乙類の意味内容に通ずる例ばかりである。他

方、「ものを思ふ」の用例についてみるのに、やや曖昧な五例(須磨²⁸・柏木¹²⁸・夕霧²⁵⁶・宿木³²²・橘姫²⁹)を除いて、乙類に通ずる例はなく、すべて、甲類の意味内容に通ずる例ばかりで

ある。「ものを思ひ知る」においては、「もの」は、単に感情の対象としてではなく、理知的な認識の対象として、把握されることによって、知的意味をも表わす語として、概念が拡大されていったのではないかと考えられる。従って、「ものを思ふ」と「ものを思ひ知る」とは、区別して考察されるべきであろう。

5

以上、「ものを思ふ」(変型を含む)における情感と、「もの」の表現的意味内容を検討してきた。その結果、「ものを思ひ知る」を除いて、「もの」は否定的意味内容を表わし、したがって「ものを思ふ」には、すべて陰性的情感が伴う、ということを明らかにしえたと思う。

ところで、以上のように、「ものを思ふ」における「もの」の表現的意味を、生動的に考察する時、そこに一つの基本的性格が見られるようである。すなわち、すべての「もの」が、恋をはじめとする、さまざまな歎き・愁え・悲しみ・苦しみ等の、否定的感情の原因や対象を表わす語として、用いられているところから、推定するのに、「もの」は、自己の意志や理性によって、抑制・統御することのきわめて困難な、いわば、自己の力をもってしては、どうにもならない世界を、表わす語ではなかったか、と考えられるのである。

「もの」は運命とおきかえてもよい観念だとされる、西下経一博士の御説に、⁽⁷⁾ こういう意味合いにおいて同感である。()

しかしして、「もの」をこのように推定する時、自己の意志や理性の働きを越えた世界を志向する感情は、勢い陰性的傾向を帯びざる

をえないのではないかと想像される。そして、この情感が形容詞化して生まれた語が、「ものし」ではなかったらうか。

弘徽殿には、久しう上の御局にもまうのぼり給はず、月の面白きに、夜更くるまで遊びをぞし給ふなる。(御門ハ)いとすさまじう、ものしと聞召す。(桐壺18①)

ただ、最後に付言しておきたいことは、「もの」の概念はひじょうに複雑であるゆえに、(語源論的にはともかく)一つの原則で割り切ろうとすることは、危険だということである。

本稿に述べたところも、あくまでも、「ものを思ふ」における「もの」に關しての、仮説に過ぎない。

注(1)「もの」を前項とする連語の検討—中古語の場合—(「論究

日本文学」十九号)

(2)「万葉集総索引」による。

(3)「源氏物語『もの』考—その構成と内容—」(「女子大国文」七号)

なお私見によれば、約四〇例がこれに相当するようである。

(4)「国歌大観索引」によると、三二四首に上るが、その中、「もの」に係る連体修飾部を持つ歌が四十三首あるので、それを除いた二八一首を考察の対象とした。

(5)「対校源氏物語新釈」を底本とした。

(6)この数字は、底本のページと行を示す。

(7)「源氏物語の『世』と『物』」(「文学・語学」六号)

(付記)

本稿をなすに当たり、岸田武夫先生のお教えをいただいた。篤く御礼申し上げる。

(京都市紫野高等学校教諭)